巻頭言

長田 俊樹

この『地球研言語記述論集』は２００７年４月にインダス・プロジェクトが正式に発足し、大西正幸さんを上級プロジェクト研究員として地球研にお迎えしたのを機に、言語記述研究会を立ち上げ、その研究会の成果として出版されたものである。現在、３号を数え、今回が第４号となる。地球研のインダス・プロジェクトは２０１２年３月をもって終了するため、本号が最終号となる。ただし、言語記述研究会に参加してくださる方々は多く、今後も別の形で続けていきたいと考えている。

この最終号を、プロジェクトのリーダーである長田の判断で、『大西正幸博士還暦記念号』としたい。大西さんは２０１１年８月に還暦を迎えられた。６年間、沖縄の名桜大学で教鞭を執られた以外は、日本ではアカデミズムの外にあり、大西さんのお名前は残念ながらほとんど知られていない。しかし、教育への情熱や学問への真摯な態度は特筆すべきものであり、還暦を真に祝されるべき人である。大西さんの師であるボブ・ディクソンは何事にも順番をつけたがる癖があるが、ディクソンの元で博士論文を書いた人の順番として、一番はニック・エヴァンズ、二番はマサ・オオニシと公言して憚らない。世界的言語学者が賞賛してやまない大西さんの言語学に対する情熱やその実力は研究会に参加された皆様がよくご存じのことである。ここでは、大西さんの知られざる一面を長田の独断と偏見に満ちた眼で紹介しておこう。

大西さんは東大闘争（闘争側でない人は紛争とよぶ）が激しく入試がなかった１９６９年の翌年、武蔵高校からストレートに東京大学文科三類に入り、のち文学部英文科に進学。東大闘争の余波が学内を覆っていて、しらけた世代に属す。そうおっしゃっていたが、ご本人は覚えていらっしゃるか。有名私立高校から東大に進学と聞くと、恵まれた家庭環境を想像するが、お父さんは大西さんが中学生のときに他界され、お母さんは大変苦労されたと聞く。

１９７５年、英文科出身の大西さんがベンガル語に出会う。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（略称：ＡＡ研）主催の夏期言語研修でベンガル語を受講したのだ。夏期言語研修は５週間みっちりと教えてくれるコースで、ベンガル語の先生はＡＡ研の奈良毅さんだった。奈良さんはお母さんが新興宗教の教祖様だったとかで、宗教本業、ベンガル語副業といった感じの一風変わった先生だ。大西さんとの共通点はお二人とも宗教的なことと、見た目がいつまでも若いことだ。このベンガル語の言語研修の後、１９７６年にはカルカッタ（現コルカタ）に留学。日本領事館で日本語教師をしながら、ベンガル世界に浸る。１９７８年には、シャンティニケタンにあるタゴール国際大学に移り、タゴール三昧の日々を送る。そして、１９８０年に帰国し、ちょうど刊行の始まった『タゴール全集』のなかのいくつかをベンガル語から翻訳し、翻訳家としてデビューを果たす。

ちょうどそのころである。私は大西さんと出会う。きっかけは私がムンダ人やサンタル人に興味を持っていることをいろんな人に話したところ、当時カルカッタに留学中だった河合明宣さん（当時京大農学部院生、現在放送大学教授）からサンタル語を習ったことのある日本人として大西さんを紹介された。そのころ、大西さんは鎌倉に住んでおられ、ＡＡ研で行われていた「コッラニ」というベンガル文学の翻訳雑誌を出すグループの研究会に参加されるというので、ＡＡ研でお会いした。それがいつだったのか。もう一つはっきりとしない。ただ、１９８３年８月に北海道の気球合宿に大西さんが息子さんを連れて参加してくださったので、１９８２年ごろのことだろう。

私は１９８４年７月から１９９０年１０月までインドに留学をする。留学期間にも、カルカッタで何度か会った。とくに、大西さんたち何人かが出資して（私には出資できる金がないので姉に出資してもらった）カルカッタに部屋を借りていた時期があり、そこにはよくお邪魔した。私の留学中にはいろんなことがあった。ときには、大西さんのグルだった、吟遊詩人として知られるバウルに、大西さんの代理で送金したこともあった。ときには、ムンダ人の妻と結婚する前に一度日本に連れて行く際、病気だった私に変わって、妻のためにインドからの出国許可をもらいに行ってくださったこともあった（ただし、許可はもらえず、最後は賄賂を払って出国した）。また、大西さんは一時期ロンドン郊外の日本人向けの高校で教えていたことがあったが、あまりのひどさに耐えかねて三ヶ月で辞めてしまったこともあった。一時はアメリカへの移住を考え、アメリカを放浪されていたが、アメリカは肌に合わなかったようだ。紆余曲折の末、１９８９年にオーストラリアに渡る。

オーストラリアでは最初、英語教師養成のためのコースに入ったが、これにはピンと来るものがなかったようだ。そこで、オーストラリア国立大学の言語学科に入り、前述のボブ・ディクソンらに出会う。驚く事なかれ。大西さんと言語学との出会いは４０歳近くのことだったのである。ボブの強烈な個性とアナ・ヴィエルビツカやビル・フォーリーといった一癖も二癖もある、まるで新興宗教の教祖様のようなスタッフ揃いの学科で、大西さんもようやく落ち着く場所を見つける。大西さんがあまりにも優秀だったので、修士課程の途中で、１９９１年に博士課程へと進む。博士論文のテーマはパプア・ニューギニアのブーゲンビル島で話されているモトゥナ語の文法で、１９９５年には博士号を取得している。なお、つい最近、このモトゥナ語文法はドイツから出版された。

１９９６年、私は文部省の在外研究員として、約１０ヶ月、メルボルン大学に滞在した。ちょうどその年の７月に、オーストラリア言語学講習会がオーストラリア国立大学で行われた。そのときには、２週間、一家で大西家にお世話になった（そう大西さんご夫婦にはお世話になりっぱなしである）。そのとき、われわれ研究会のメンバーである野島さんにもはじめてお会いした。なお、その講習会については『第３回オーストラリア言語学講習会とオーストラリア言語学界管見』としてＡＡ研の通信 90 号 24–33 頁に報告したので、興味のある方はご覧ください。そのころ、大西さんはディクソンの下でポスドクをやっていて、世界のいろんな言語の類型論的特徴を抜き出す仕事をやっておられた。その仕事はかなりハードなもので、夜も寝ずにやっていたので、奥様のあゆ子さんが大西さんの身体を心配しておられたのが記憶に残る。その大

西さんのお仕事が現在もラトローブ大学の類型論研究センターに閲覧できる形で置いてある。ラトローブ大学に行く機会があれば、ぜひ見てほしい。

私の在外研究の期間がおわって帰国したころ、大西さんの沖縄名桜大学への就職が決まり、１９９７年５月にオーストラリアから沖縄に拠点を移す。この名桜大学時代には宮岡さんが主導して行った特定領域研究『環太平洋の＜消滅に瀕した言語＞にかんする緊急調査研究』（１９９９年秋からスタート）に大西さんも参加されたので、大西さんのことをその時期知った方もいらっしゃるのではなかろうか。なお、私はこの特定領域研究の公募に応じたが、環太平洋ではないということで公募からは落とされた。もっとも奈良さんはインドのトダ語の調査で申請して通ったので、地域だけではないのかもしれない。

沖縄名桜大学での大西さんも、ハードワークの連続だった。夜は２時３時過ぎまで、朝は早く大学に出て、研究ばかりではなく、外国語教育主任として学務にも忙しくされていたようだ。それで２００３年３月には名桜大学を辞めてしまった。古巣のオーストラリアに戻られ、今度はシドニー大学にしばらく在籍後、ドイツのマックス＝プランク研究所に移り、二年間はライプチッヒに住んでおられた。そして、私のプロジェクトの上級プロジェクト研究員となって今日に至る。

大学を辞める、辞めると口癖のようにいう人は結構いるが、実際に辞めてしまった人というと、世界に冠たる東南アジア研究のコーネル大学をスパッと辞めてしまったディフロースさんぐらいしか知らない。もっとも言語学そのものを辞めてしまった人は何人かいる。ニックをメルボルン大学に呼んだマーク・ドゥーリーはアチェ語の文法を書き、言語学のすばらしい業績を残していながら、英国国教会の牧師（これを英語では Minister と呼ぶが、マークが Minster になるとニックに教えられたときには大臣になるのかと驚いた）になってしまった。現在、彼のセント・マーク教会は反イスラムで名をはせているが、彼の言動の矛先が宗教に向かってしまったのはとても残念である。もう一人あげると、ミリアム・クレイマンがいる。ベンガル語などの業績があるクレイマンは、記憶にまちがいなければメルボルンのラトローブ大学にいたこともある。聞いた話によると、何でもインド人の夫を亡くしてから言語学が嫌になってしまったのだそうだ。言語学を辞めた後、医者となり、さらに弁護士となって、現在は弁護士として活躍中だ。

少し話がずれた。大西さんの話に戻ろう。大西さんの言語学における業績として、私が印象に残っているのはアナ・ヴィエルビツカとクリフ・ゴダードが編集した *Semantic and Lexical Universal* という論文集に “Semantic Primitives in Japanese” という論文を掲載したことである。言語学論文としてはたぶん処女作だったと思う。刊行は１９９４年であるが、論文執筆は１９９１年頃だったように記憶している。なぜよく覚えているかというと、私はその当時女子高校で非常勤講師をしていて、日本語での人称代名詞の使用例を女子高校生から聞いたことを大西さんに伝えたら、そのこと（たしか女子高生がオレを使うことが珍しくないということだったように記憶する）を論文に書いてくれたからだ。今３０年にわたる交友を振り返ってみると、大西さんのお役に立てたのはそれぐらいではなかったか。

もう一つ、記憶に残っているのがサーシャ・アイケンヴァルトとボブ・ディクソンとの三名共

同編集で *Non-canonical Marking of Subjects and Objects* を出版したときのことだ。その論文集に入っている日本語に関する論文（誰が書いたかはここではあえて伏せておく）について、大西さんはその日本語の分析がおかしいと指摘したのだが、ボブは政治的な判断（？）で取り合わなかったのだそうだ。この論文集では、大西さんが５０頁にもおよぶ Introduction を任され、ボブとサーシャの期待を一身に背負っての仕事で、気苦労が耐えなかったにちがいないと勝手に推測している。その他、ブーゲンビル島のモトゥナ語のテキストを出版したり、ドン・レイコックが残したブイン語辞書を編纂したり、パプアン言語学でも大活躍だが、その辺は２１世紀に入ってからの出来事で皆さんもご存じだと思う。

ベンガル語の翻訳に関しては、タゴールの『家と世界』（上）（下）がレグルス文庫として１９８６年に、また現代ベンガル作家のモハッシェタ・デビ『ジャグモハーンの死』（めこん）が１９９２年に、それぞれ出版されている。このモハッシェタ・デビには大西さんと一緒に会いに行ったこともあり、そのことを翻訳本と一緒に配られるパンフレットに書いてもらったことも記憶に残っている。バリガンジ駅の近くのモハッシェタ・デビの家のことやそのとき一緒にいた大西さんの姿が目に焼き付いていて、時々夢に出てくる。なぜなのか。まったくその理由がわからない。

大西さんとの日々で思いだされるのは、カルカッタの路上でチャイを飲みながら聞かされたヒジュラの話である。その話を聞いたのはたしか１９８０年代半ばのことだ。ヒジュラとは半陰陽の女装した芸能集団である。その独特の歌と標準ベンガル語とはちがったベンガル語の歌詞をなんとか録音したいと意気込む大西さんの目はキラキラしていた。ヒジュラは裏の世界の人々なので、なかなか録音させてくれない。そう付け加えてくれたが、残念ながら、私はその歌を一度も聞かせてもらったことはない。ちゃんと録音できたのかどうかも聞かずじまいだ。

大西さんが書いたもので記憶に残っているのは、「絶対の降る場所」だ。たしか、インド関係の本を出版する春秋社の情報誌『春秋』に掲載された。大西さんのバウル体験が書かれたもので、大西さんがいかに感性の人であるかがよくわかる。「絶対」なんてことは絶対ない。そうか、もし絶対なかったら、そのときには絶対が使える。このパラドックスに気がついて喜んでいる私などとは、大いなる相違を見いだす。絶対なるものを求めてやまない大西さん。一方で、なぜ自分が絶対者にならないのか、そんなことばかりを夢想する私。私とは性格も指向性もまったく正反対の大西さんだが、三十年もの間、交友関係を保ってこられたのはふしぎでたまらない。これまでのご厚情に感謝してやまない。

あるときはタゴールの翻訳家、またあるときはベンガル映画の解説者、そしてまたあるときはインド楽器の演奏者、はたまた日本語教師や英語教師と、多様性を自ら具現してみせる大西さんは、３０年前と少しも変わらぬ容姿で、ブーゲンビル島で危機言語を記録する。還暦を迎え、今度は何をやってくださるのか。今から楽しみだ。

大西さんとの思い出を語り出すと、いろんなことが走馬燈のようによみがえる。ぐたぐたと書いていてはせっかくの還暦記念論文集が台無しになる。感謝を述べたところで、ペンをおくことにする。